

記号としての乱歩

The role of Ranpo Edogawa in mass media

鈴木 侘奈

Rena Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻日本文学専修 修士課程

キーワード：江戸川乱歩，作家論，近代文学，探偵小説

Key words: Edogawa Rampo, Writer Theory, Modern Japanese literature, Detective Stories

1. 研究目的

本研究は、江戸川乱歩という作家について同時代から現在までどのように享受され続けたか、記号としての作家について明らかにすることを目的とする。「江戸川乱歩」が誕生した当時から現在まで刊行されている雑誌などに残された人々の言葉を参考にしながら、どのような作家として時代に求められていたのか解明するものである。

2. 研究実施内容

探偵小説については長年学術的な研究がされておらず、乱歩に関しても研究を牽引してきたのは探偵小説作家やそれを専門とする批評家などの文学研究の領域外の研究者であり、それは現在も変わっていない。

乱歩に関する研究は没後間もない1970年前後から開始されていく。当時、ゴシック・リバイバルと異端文学ブームの余波を受けて、乱歩もまた既成の秩序を破壊し怪奇な世界を描いた異端作家として論述の対象となった。そこではのぞき趣味、レンズ嗜好、人形愛、玩具愛好などの作家的なモチーフがキーワードとして生み出された。併せて探偵小説作家としての乱歩の軌跡が文壇状況と創作の在り方を踏まえて評伝として残されている。

しかし、どちらの立場の研究もあらかじめ設定した方法論を用いて進められるため、それまでの乱歩像を崩すようなものは見受けられなかった。前者は小説の美しさの痕跡を読み取ることで異端作家としての乱歩を描いたが、論者が見つけ出したモチーフを乱歩の小説から確認し、そこに小説の読みを還元する分析までにとどまっている側面があった。また後者はトリックのリアリティや論理

的な結構を基準とし、本格探偵小説として乱歩を評価したが1920年代の乱歩の小説を評価するあたりかたは、乱歩の自伝などにみられる本格探偵小説に挫折して通俗化していくという一般的な乱歩像を補強し続ける側面があった。このことはそれぞれの立場の研究が思い描く「ひとつの作家像」を成り立たせるために都合の悪い小説や記述が切り捨てられていることをも意味しており、その点において乱歩に関する問題は十分に検討されていないことがわかる。

どちらの方法論においても1930年代前後に大衆読者へ向けて書かれた探偵小説は批判の対象になったが、1980年代はじめのニューアカデミズムの余波を受けて記号論・構造主義が文学研究に導入されていた。このような背景から、文学研究は作家中心のものからテキスト中心のものへとシフトされていった。そこでは乱歩の作品における大衆性に焦点があてられ、さらに2000年代には小説に具体的な歴史性や地域性を導入するためにテキストから言説中心の読解へと推移する。それらの変化とともに乱歩研究は言語表現と、所説を規定した同時代言説、メディア、それを支える読者層、文化・歴史状況との関係を対象とした考察へ変化していく。

実際、2000年代以降、2014年に生誕120年、2015年には没後50年ということで近年も研究や関連書籍の刊行、乱歩の作品を原案としたメディアミックスなども盛んにおこなわれている。

作家像の調査にあたって、まず「江戸川乱歩」がどのような作家を目指していたのかという点に注目して資料の収集を行った。乱歩は収集家としての一面も持っており、自身に関する資料を後世

のためという名目で昭和14年頃から発禁されるようになりその傷心の時期に編まれた『貼雑年譜』をはじめに調査対象とした。理由としては、当時のメディアからの扱われ方が掲載されている記事からわかるだけではなく、その記事に関して乱歩自筆のコメントが添えられていることや、その記事を確実に乱歩の目に触れられているという確たる証拠であることもこの資料の有用性である。その資料の中で研究にかかわる興味深い箇所があった。昭和5(1930)年の「報知新聞」に掲載された「死に絵と『死の鳥』怪奇な装飾品に囲まれて」という記事(広告)である。インタビューの内容としては、記者が江戸川乱歩の戸塚の家を訪ね、その家の中の様子を事細かに記し、記者が気になったことを乱歩に問いかけそれに対して答えるというかたちであった。内容は省略するが、そこで私が注目したのは文章の一部分だけを切り取ったタイトルや「真暗な中に蠟燭の灯が」「血のやうな真赤な電球」「エロとグロといふ言葉」といった強調された小見出しだ。他にも記事全体の四分の一を占める範囲で人骨の写真が二つ載せられているが、記事の中でこれらの画像について何も触れていないところからイメージ画像として使われていたのだと考えられる。

現在も著名人の言葉の一部を切り取り、その人物のイメージを形成するという文化は残っているが、乱歩の場合も同様のイメージ操作があったのではないかと仮説を立てた。大正12(1923)年にデビューした江戸川乱歩がどのようにして昭和5(1930)年の時点で「エロ」や「グロ」を描く異端作家として受容されていったのか資料をもとに調査を行った。

はじめに、探偵小説の一ファンであった平井太郎が「江戸川乱歩」として文壇に登場するまでの過程や影響を及ぼしたものを、それがどれほど乱歩に影響を与えたか「探偵小説四十年」などの記述を参考にしながら欧米の探偵小説と乱歩の小説との共通点を行い、どのようなポイントが探偵小説を探偵小説たらしめるものと考えていたのか考察を行った。

次に、平井太郎がどのような過程を経て探偵小説の世界に登場したのか、本人の随筆やデビューまでの後押しをした当時「新青年」の編集長であった森下雨村や既に探偵小説作家として活躍している小酒井不木の手紙や編集後記をもとにデビュー時の乱歩(の作品)の魅力进行调查した。それま

で「新青年」では欧米の本格的な探偵小説を翻訳したものが主で掲載されており、日本人による創作小説はあまり期待できないものとされていた。森下も同様の理由で一度は乱歩の申し出を断ろうとした。しかしそうした本格的な探偵小説に目が肥えた人間に評価された作家として華々しいデビューを乱歩はしているのである。デビュー当時の新聞各社広告文や同じ探偵小説を書く作家からの批評を調査すると、やはり昭和5(1930)年の「報知新聞」にあるような通俗的な異端作家としてのイメージは見受けられなかった。むしろ、乱歩の作品は欧米の探偵小説にみられる要素に加えて人間の心理に注目した新しい探偵小説としておおむね歓迎されているようであった。

また、デビュー作の「二銭銅貨」掲載時に「探偵小説について」という題で文章を「新青年」によせており、その中で探偵小説と滑稽小説が紙一枚の差であることに言及している。そしてその差とは「推理力による発見の興味」を読者が抱くことであると考えているようだった。ここから初期に乱歩が想定していた読者が読み取ることができ。しかし、その読者は乱歩を支える存在になるが、その読者は時代の流れとともに変化し、乱歩の作品に対して鮮やかな推理や巧妙なトリックに注目するのではなく、物語に登場する「普通ではない人間」に魅力を感じるようになっていったのではないか。

そして乱歩自身と外的な要素の相互的な作用によって、現在も色濃く残る「江戸川乱歩」という作家のイメージが形成されていったのではないかと考えられる。

3. まとめと今後の課題

本研究では、乱歩の目指した探偵小説作家としての在り方、また探偵小説そのものの在り方について作家自身はどのように考えていたのかということを知ることができた。それに対して突如探偵小説界に登場した「江戸川乱歩」という作家について、そしてその人物が書いた作品について文壇や社会はどのような反応を示し、如何にして受容していったかを纏めることができた。今後は、初期(1923~1927年頃)以降に調査範囲を移し、大きな休筆期間の前後や「芋虫」の発禁やほぼ全ての作品が絶版となった太平洋戦争での活躍、戦後の大衆がどのような「江戸川乱歩」を求めたのかという点に注目して研究を進める。

今後の課題としてはデビュー前から特別思い入れがあり、本格派の作品を発表した探偵小説専門の雑誌「新青年」を中心に、乱歩が作品を発表した雑誌や新聞を中心に調査を続ける。そのほかにも「人間椅子」を発表した大衆小説の草分け的雑誌である雑誌「苦楽」や「週刊報知」、エロ・グロ・ナンセンス要素が満載の長編「蜘蛛男」を連載した雑誌「講談倶楽部」、少年ものとして多くの支持

を得た「怪人二十面相」を連載した雑誌「少年倶楽部」や「探偵趣味」、「サンデー毎日」、「キング」、「文芸倶楽部」などに掲載された同時代の作家や批評家からの評価を調査し検討したい。また、「江戸川乱歩」が登場するフィクション作品等にも調査範囲を広げ、どのような記号として「江戸川乱歩」が社会に受容されていたのか検証を続けたい。